ノーベル賞
文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　2

ロマン・ロラン
イェンセン

訳者　宇佐見英治
河盛好蔵
山口三夫
竹内孝次

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和45年12月5日　発　行

発行者／石川数雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号　101
振替　東京180番
電話　東京294-1111（大代表）

印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
クロス
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社　1970　Printed in Japan

0397-522021-3062

目次

ロマン・ロラン

選考経過…グンナー・アールストレーム……山口三夫訳…5

コラ・ブルニョン……宇佐見英治訳…15

ピエールとリュス……河盛好蔵訳…145

愛と死のたわむれ……山口三夫訳…185

ベートーヴェンの生涯……山口三夫訳…231

人と作品…アンリ・ブチ……山口三夫訳編…273

著作目録……山口三夫編…378

イェンセン

選考経過……シェル・ストレムベリイ……竹内孝次訳……290
授与演説……アンダーシュ・エステルリング……竹内孝次訳……293
受賞演説……竹内孝次訳……295

ヒンマーラン短編集……竹内孝次訳……297

気はやさしくて力もち……300
アーネと牝牛……304
闇の帷の中で……306
眠りこそわれらがいのち……313
セーシル……324
むっつりモウエンス……331
イェスパー牧師……341
三十三年……350
人と作品……トム・クリステンセン……竹内孝次訳編……361
著作目録……竹内孝次編……385
肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、288
カラーさしえ／フォンタナローサ（ロマン・ロランの作品）32～33、64～65、80～81、96～97、128～129
ジャン・フランソワ・ジネイ（イェンセンの作品）304～305、336～337、352～353

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ロマン・ロラン

一九一五年受賞（四十九歳）

フランス　一八六六～一九四四

コラ・ブルニョン

ピエールとリュス

愛と死のたわむれ

ベートーヴェンの生涯

ロマン・ロラン

選考経過

ロマン・ロランに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

スウェーデン海外文化振興協会
グンナー・アールストレーム

一九一四年のことである。その前の冬、ラービンドラナート・タゴールがノーベル文学賞を受けていたが、これは彼の作品が具現している美しい清澄な思想に表わされた敬意であった。この敬意に満ちた表彰には、なにか象徴的なものがある。あの第一次世界大戦の大悲劇を明日にひかえて、苦悩するヨーロッパがガンジス河のほとりに鳴り響く調和のことを考えたのである。毒々しい敵意に熱狂した不幸なわが大陸は、平和が支配し、外国からの手紙の到着も不幸のしるしとはならない、ヨーロッパ以外の国々を注意ぶかく探していたのである。蓮の花は、よりよき未来への希望をもたらし、過去への忘却を許しつつ、夜、花ひらく。パリで、ロンドンで、ベルリンで、人々が大いに必要としていたのはまさにこの希望と忘却であった。

夏は暑かった、一九一四年というとてつもないあの年は。望みどおりにぶどうの花は咲きほこり、収穫の見込みはよかった。サライェヴォの弾丸は六月二十八日にとどろきわたった。七月二十三日、オーストリアがセルビアに最後通牒を送った。ヴィーンの皇帝フランツ＝ヨーゼフと矢つぎばやの約束をかわしたのち、ヴィルヘルム二世はヨット「ホーエンツォレルン号」に乗って、いつものようにノルウェーの巡航に旅立った。

フランス共和国大統領もまた外国旅行が好きであった。彼はセント＝ペテルスブルグでニコライ二世公式訪問を終えたばかりで、その艦隊はストックホルムへ近づきつつあった。スウェーデンのグスタフ五世は七月二十五日、慣例的な敬意をつくして彼を迎えた。しかし、近衛兵のトランペットが『ラ・マルセイエーズ』をかなでている間に、あわただしく電報の音がカチカチ鳴った。レーモン・ポワンカレ氏はパリへ呼びもどされていた。大急ぎで赤じゅうたんが巻かれた。こうして三色旗はその晩に極北の首都から姿を消したのである。

事件は加速度的な速さで進行していった。オーストリアは七月二十八日戦端を開いた。八月一日、ドイツがロシアに宣戦を布告する。その数時間後には、ドイツ軍がルクセンブルグに旗をひるがえす。八月三日、フランスにも宣戦が布告され、翌日、ベルギーが侵攻された。イギリスは八月五日に戦争を開始した。世界中が恐れ、だれも望んではいなかった破局が、数日のうちに仮説から事実となった。機関銃や大砲がうなりを立てる、血のにおいのする恐ろしい現実。人々は殺し合い、死骸は夏の暑さに腐った。しかも、これはさらに恐ろしい大殺戮の序の口にしかすぎなかった。ヨーロッパのベローナ[1]が、その貯えを使い果たすにはまだ遠かった。その後、戦場となるシャンパーニュ地方やフランドル地方を眺めわたせば、彼女はきっと、あのアウグスト・ストリンドベリイの史劇のなかの一人物のように、こう叫ぶことができたであろう――「お前はまだお前を待ちかまえている苦しみのすべてを知らないのだ！」と。

アルフレッド・ノーベルの国である小さな中立国の水平線も暗くなっていった。バルチック海や北海ぞいの灯台の灯は消えた。教会の鐘は昔の戦いの日々のように鳴りわたった。徴兵定員は動員され、さらに、戦闘力はないが熱意に燃える四十歳以上の市民から成る応急の国民軍で補充された。歴史への譲歩が起こった。兵士たちはカール十二世[2]様式の三角帽をかぶった。敵もまた同じく伝統的なものであった。すなわち、ロシアであり、その政治的渇望とスカンジナヴィアにおけるスパイ活動が世論をゆさぶっている、ツァーリたちの不滅のロシアであった。コザック軍は東プロイセンにまで馬を進めた。大砲はタンネンベルク[3]で鳴り響いた。ドイツの宣伝が無実だと抗議したことは大きな影響を及ぼし、多くのドイツびいきの人々の敏感な心の弦をふるわせていた。

要するに、この事件はノーベル財団とその国際的な賞が象徴している諸傾向に、痛ましい否認をぶっつけるものであった。前年までのあの古きよき平和賞は、一撃のもとに一種の先史時代的非現実性のなかに没してしまったのである。戦乱に陥ったヨーロッパを見る苦しみ

を、尊敬すべき老ミストラル[4]はまぬかれた。彼は一九一四年三月に死亡し、パウル・ハイゼが数週間後に彼につづいて亡くなった。ヘンリク・シェンキェヴィッチはあやうくオーストリアに監禁されそうになり、祖国ポーランドを去って、さびしげにスイスをさまよい、一九一六年に死んだ。ホセ・エチェガライ[5]もほぼ同じころに亡くなった。大英帝国と好戦的名誉のテュルタイオス[6]のように、ルドヤード・キップリングはいちはやく戦線におもむき、《野蛮なフン族》に相対するジャーナリストたちの列に位置を占めた。彼はたったひとりの息子をフランドル地方の戦場で失ったのであった。モーリス・メーテルリンクは祖国ベルギーを失い、そこで犯された残虐行為を罰するために燃えるような呼びかけを発した。職業的理想主義者(イデアリスト)として、ルドルフ・オイケンは平然として体制に身をまかせ、ドイツの正当な権利のためにというのでいつもながらの饒舌(じょうぜつ)を奉仕した。ノーベル賞の威信のために増幅された声をあげて、この戦争の立場を最初に弁護した人のなかには、ゲルハルト・ハウプトマンもかぞえられる。[7]

このような状態で、ノーベル賞をどうすることができたであろう？困難は突然あらわれたのではなかった。戦争が勃発するまえから、賞の授与は翌年の六月、すなわち一九一五年六月に延期すると決められていた。これは便宜的な、まったく現実的な措置であり、流動する政治情勢に強制されたわけではなかった。この日付変更は、年ごとにますますはっきり表明されており、ノーベル祭は、白霜におおわれた陰気な十二月十日でなく、もっと快適な季節に行なおうという願いにこたえたものであった。人々はあの革命暦十一年牧月(まきづき)(五―六月)二十日に行なわれた「主神」祭のように、北国の空が一年で最も美しい季節に、戸外における民衆祭を創始しようと夢みたのである。

だが、残念なことにそうはならなかった。「主神」はそれを望まなかった。戦争の女神がその王座を奪ってしまい、やがて、「悲惨の聖母」が女神の脇の席につくこととなった。もっとも、ノーベル委員会は、候補の記録に関しては恒例のごとく断固たる態度をとり、記録は規約にのっとって一九一四年一月三十日に委員会に寄託された。二十五名の候補者があったが、その何人かは新人、他はこれまでも候補としてあげられた人々であり、特別センセーショナルな候補はなかった。いつものように何回もの討議ののち、スイスの作家、カール・シュビッテラー[8]に推薦は集中した。彼は以前にも、荘厳な形式のもとにりっぱな資格ある権威筋から推されたことがあった。十月十六日付の意見書は、政治的資質をもった著名なウプサラ大学歴史学教授の手によって起草されたものである。それは理性的かつ客観的な中立精神に支配されて、あらかじめいくつかの留保を表明していた。

「われわれはいまや、科学、文学、芸術界のもっとも有名な代表者たちが、いちばん予想もできなかった国でさえ、突如としてこの上なくはげしい愛国的熱狂に全面的にとりつかれたことを表明する光景に立ち会っている。しかも同時にまたわれわれは、彼らの大多数が熱にうかされ、いわば平衡を失い、政治的敵国の文化面の仕事と共通な彼ら自身のすべてのものからむりに身をひき、それらの仕事に対して公然と激しい非難を表明し、こうして諸民族相互の憎しみの圧力に起因する批判感覚の弱まりを証明するのを見ているのである。そして幾人かのノーベル賞受賞者たち、とりわけメーテルリンクやハウプトマン、オイケンやキップリングが、われわれの時代がここから脱するときは変形されていることになる危機の転換にけっきょくはなんら効力をもたない、この種の言論戦に巻きこまれてしまい、彼らは激しく互いを攻撃し合う機会をつかんだのである。

われわれが生きているかかる時代に、アカデミーは格別に重い責任を感ぜざるをえない。この責任には、アカデミーなりに、つまり受賞者を選考することによって、かかる怒りに新たな爆発をひきおこす危険がひそんでいるからであり、この怒り自体が、アカデミーが引き受けている仕事に対する今日ではほとんど驚くにあたらない誤解のために、われわれ自身の国に振り向けられかね

1 古代ローマの戦争の女神。
2 一七〇〇～二一年の北方戦争でロシアと戦い敗れたスウェーデン王。
3 東プロイセン南部。
4 以下、これまでのノーベル文学賞受賞者が登場する。
5 ロマン・ロランはこの時期にスイスで彼と知り合った。
6 スパルタを鼓舞した古代ギリシアの戦争詩人。
7 これに答えたハウプトマンへの公開状から、ロマン・ロランの発言が始まった。『戦いをこえて』を参照のこと。
8 一九一九年ノーベル文学賞受賞。

ないからである。」

一九一四年秋の一連の事件は、さらにこの論拠の力を強めた。諸国民の和解をほめたたえるには好都合な時期ではないと、当然のことながら一般に考えられていた。この種のことを表明しようものなら、容易に、この上なく痛烈な皮肉、また時代の苦悩への挑戦と考えられたことであろう。小国スウェーデンには、舞台裏にひっこみ、メダルや証状や賞金をふりまわして諸列強の格闘に巻きこまれることなどないようにするのが、似合ったことである。勝ったのはこういう意見であった。一九一四年度のノーベル賞は保留され、その後ノーベル記念図書館の費用に当てることが決定された。

これでよかったのだろうか？　意見が分かれた。さまざまな階層社会で、スウェーデン・アカデミーが義務を果たさなかったといって非難された。アカデミーは、戦争を前にしてふがいなくあきらめるべきではなかった、そうして野蛮な大国の力を認めることになるのを拒絶すべきであった。平和の名において抗議として、いつものように賞を授与していたほうがずっとふさわしかったであろう。リンネやベルセーリウス[2]を生んだ国は、世界の上に落ちてきた闇に向かって、たいまつをふりかざす義務があった。戦争の恐怖が見のがしてくれた北欧の小王国は、その特権的な立場を利用して、武器の響きがやむ日のために準備すべきであった。文化の分野において、中立性を積極的な価値に変換することが重要であったのだ。

人類の未来とまだ遠くにある平和とが、北方の中立国の世論一般の気がかりだった。保守系の新聞「スヴェンスカ・ダグブラデット」が、一九一五年の春、世界的なアンケートを行なったが、その設問は次のようなものであった――「戦争は、文化面における国際協調にどのような結果をもたらすとお考えでしょうか？」それに対する回答は、たんにその答えている内容だけでなく、それを書いた人々の地位の高さにおいても興味ぶかい。スウェーデンの首都の新聞紙上で、当時のもっとも有名な名前のいくつかが出会ったのである。

アドルフ・フォン・ハルナーク――「われわれドイツ人は祖国の生存のために戦っている。それゆえ、ほかのことを考えたり、明後日のことを心配したりする時間と欲求をもっている者は、われわれのなかにはほとんどまったくいないだろう。」グリエルモ・フェッレーロ――「戦争のあと寛容も折衷主義も可能ではないだろう。ひとつの選択が必要だろう。この避けがたい選択の必要性がいくたの論争をもたらすだろうが、この戦いは、戦争に不意をつかれる日までヨーロッパの学界が日々を送ってきた不安定で不実な平和よりも実りゆたかなものとなろう。」H・G・ウェールズ――「ドイツは思想や意志を奴隷状態におとしめてしまった。ドイツの意志を破壊することは、世界思想の解放に必要な準備作業である。」アンリ・ベルグソン――「戦争の翌日、人々の精神がどのような状態にとり巻かれるかは、この戦争中に精神が進化するその様態にかかっている。」エミール・デュルケム――「わたしは盲目的愛国主義が恐ろしいが、冷酷な組織的残虐さも憎んでいる。したがって、わたしが下心なく、またわたしの全身がふるえることなく、自分の手をだれかドイツ人に差しのべることができるようになるまで、長い歳月がかかるだろうと心配である。」モーリス・メーテルリンク――「人類を解放してくれる偉大な平和を待とう。」

ほんの断片しか引用しなかったこれらの声に、スイスのジュネーヴから来た一つの宣言が加わる。それは一九一五年秋、あれほど論議をよんだ著書『戦いをこえて』に収録された。語るのはロマン・ロランである。

「明日のヨーロッパ思想は戦線にいる。ある陣営から他の陣営へとののしり合っている騒々しい知識人たちは、なんら明日の思想を代表してはいない。戦争の恐ろしい現実を経験したのち、戦争から帰って来る民衆の声が、人類の精神的案内人としての資格がないことが暴露されたこれらの人々を、沈黙させてしまうだろう。……今日戦場で犠牲にされている、何百万という罪のないいけにえたちのために、わたしは苦しむ。しかしわたしはヨーロッパ社会の未来の統一については、なんら心配してはいない。今日の戦争はそのための血の洗礼なのである。」

アンケートの続きはわれわれをノーベル賞の論戦の世界にみちびく。問い合わせを受けた人々のなかに、われわれはイギリス人、ヴァ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

イオレット・ベジットを見いだす。彼女はヴァーノン・リーというペンネームで、イタリアの文学や芸術に関するすぐれた研究とともに、その哲学的対話や平和主義者としての発言によって、幅ひろい読者をもっていた。青春期を送ったフランスでもまた、アナトール・フランスの『赤い百合』に出てくるミス・ベルのモデルと考えられ、特別有名であった。スウェーデンの新聞が、彼女に、イギリスの火つけ役たちとたもとを分かち、人々の心情や精神の世界主義的結合のためにりっぱな発言をする機会を提供する。彼女のことばはあまり明快ではないが、その意図を読み誤ることはできないだろう。とりわけ彼女が結びとして、ノーベル賞当局に直接次のように話しかけるときは——

「実際設立者の企図を賢明にくみとり、高潔にこれを実現することがかつて問題となったとすれば、今こそまさにその時です。ノーベル賞の授与が直接平和と知的協力に役立つように計画されえないものでしょうか？　そして、平和の大義を支持するために用意されたこの賞が、戦前に、とはいえあらゆる好戦的な苦しみが増大しつつあったとき、フランス人オリヴィエのかたわらに道づれとし補い合うものとしてドイツ人ジャン＝クリストフを立たしめた作家、敵対行為がはじまったのちには『戦いをこえて』を書いた作家に、授与されることはできないのでしょうか？」

これは『ジャン＝クリストフ』の作者が、平和賞という形ではあったが、公式にノーベル賞に関して名前を挙げられた、最初であった。この偶然のできごとはフランスの世論に深い動揺を与えた。ずっとまえから《ロラン問題》は、火に油をそそいだような論議の主題となっていた。

宣戦が布告されたとき、ロランはスイスにいた。彼はその後もジュネーヴにとどまり、「ジュルナル・ド・ジュネーヴ」紙に、一九一四年八月二十九日のゲルハルト・ハウプトマンとその同国人たちにあてた公開状を最初とする、一連の論文を発表していた。

「あなたたちはいったい何者であるのか？　そしていまや、野蛮人という名称を拒否するあなたたちは、ハウプトマンよ、どのような名で呼ばれたいのか？　あなたたちは、ゲーテの孫か、それともアッティラ[3]の子孫なのか？」

しかしジュネーヴ湖畔の孤独者は、このような抗議だけで満足してはいなかった。彼は連合国側の大義名分を、執念ぶかい憎しみを、そしてライン河のよき側でもあふれ出ている復讐への渇きを、いっさい疑ってかかった。これは人々の感情を傷つけることであり、少なくとも不快な思いをさせることであった。軍隊は戦場を血まみれにしていた。一般市民は、日ましに強まる全面戦争の重圧に屈していった。無償の中立に保護されたこの人間性探求者のみが、精神の完全さや最高正義の命令について崇高なことばを発していた。この態度は、敵の宣伝が率直な彼の発言を恥知らずなやりかたで利用していただけにますます、批判を招いていたのである。

「ドイツの策略は、ロランの仲介によって、全ヨーロッパにひろまっているとして、歴史家アルフォンス・オーラールは一九一五年三月六日、「強硬派」紙で認めていた。ここは、少しも得るところのないこの喧騒のなかで、高い精神的価値と低劣な本能とを突き合わせていた、賛否の重さをはかる場所ではない。外部から情況を見るならば、ただロマン・ロランが擾乱のまっただなか、パリの住居に住んでさえいれば、雰囲気はもっと純粋なものとなっていただろうと考えざるをえない。彼の声は、国境の向こうから、安全な中立地帯からやって来た。だから彼のことばにはある種の祖国を見棄てたような響きがあり、ことばが実際に表現している主体的勇気のある精神や苦悩する良心とこの響きとはうまく一致していなかった。自発的に友人たちをふるい立たせ、内省にかりたてえたはずの意見も、地理的位置の宿命によって、たんに無自覚や裏切りと非難されたにすぎなかった。さらにその上に加わったのが、ロランを弁護した人たちがかならずしも推奨に値しなかったことである。とくに「ボネ・ルージュ」紙で彼を弁護した人々がそうであった。このパリの新聞は牽制攻撃を行なうあらゆる機会をねらっていたドイツの宣伝から、資金援助を受ける、というより買収さ

1　博物学者。
2　化学者。
3　四世紀に近東諸国を征服し、荒らしまわったフン族の王。

れてさえいたのである。

『フランスに敵対するロマン・ロラン』――これはアンリ・マシスが一九一五年に発表したパンフレットの題名である。フランスの新聞雑誌では、解説者たちはこの作家の軍隊における階級、「第二十六歩兵連隊陸軍中尉」を印刷するところまでいった。こう書くと好ましい効果をもたらすと、彼らには思えたのだ。この軍人を「ジュルナル・ド・ジュネーヴ」紙の文民に対立させる対照のためである。「ロラン氏が語ると、フランスは自己の身を打つのである。」この論説の続きは、これに劣らず辛辣である――「ロラン氏は中立者である。ロマン・ロラン氏は中立を天職としているのだ。彼はもはや祖国なく、家なく、特性なきすべての者の避難所である。普遍性を口実として、彼はさまざまの異なる信条が交差する四つ辻なのである。もろもろの規準、さまざまの教義、いろいろな法則、彼はすべてを混ぜ合わせることによっていっさいを廃止してしまうのである。もっとも明らかに定義されたことばも、彼が使うと、もはや現実をおおわず、意味がからっぽになるようだ。ことばがさらに《観念的》になったということである。」

論争圏内はしたがって戦闘的なエネルギーを帯びていた。十一月はじめストックホルムから「ニューヨーク・ヘラルド」紙によって虚報が伝えられると、それは絶頂に達した。この情報源によれば、ロマン・ロランが一九一五年度ノーベル賞に選ばれたというのだった。ニュースはすぐさま取り消されたが、諸情念をかき立てる時間がなかったわけではない。「唯一の中立的フランス人」という見出しで、「ル・マタン」紙は、情況を特色づけたが、この情況は一方フランスの新聞雑誌に忠実に反映していた――

「ロマン・ロラン氏は目下スイスに住んでいる。スイスの新聞に論文を書いて、ドイツ文化をほめそやし、望んでいなかった戦争にわれならずも巻きこまれた不幸なドイツ人たちに同情しているのである。

しからばロマン・ロラン氏はドイツ系スイス人であろうか？

いやけっしてそうではなく、ロマン・ロラン氏はフランス人である。彼は高等師範学校の出身で、ソルボンヌの教授である。彼は動員がはじまるまえは、パリを離れたことがなかったのである。

あの動員の日、彼はその愛国的義務を果たしうる場所はただひとつしかないと判断して、ジュネーヴへ立ち去ったのである。

そこから、彼はあのだれもが知っている平和主義的労作を世界に差し出したのである。

それらの労作の結果として、彼にドイツびいきのスウェーデン人たちの尊敬を――そして金を――もたらしたところなのである。」

そうだ、ドイツびいきたるわれわれ。こうして、ノーベルの国がその対象になりはしないかと恐れてきた攻撃が、間違いなく加えられたのであった。しかし、受賞者に加えられた猛烈な剣の攻撃にくらべれば、こんなものは針の一刺しにすぎなかった。「今年は、ノーベル賞の賞金は二十万フランではなく、三十デナリウスとなろう。なぜなら、賞金を受けるのはロマン・ロランだからである。三十デナリウス、これは自分の神を引き渡した使徒にバリサイ人たちが支払った代価ではないか？」と、モーリス・ド・ヴァレフは機知をひらめかせ、この作家の名前を「ジェルマン・ガヌロン」[1]ともじった有名なパロディの助けを借りて、こう自問した。三十デナリウスのバリサイ人たちの国スウェーデンでは、人々はこの論戦のことをよく知っていた。ストックホルムのある新聞のパリ通信員は〝ロラン問題〟を次のような数句に要約していた――「彼は白旗を手ににぎり、戦士たちの塹壕の間に立ち上がるという向こう見ずな企てを敢行し、たちまちにして打ち倒されてしまった。この瞬間、一般世論にとって彼は腐った死骸にほかならず、その上につばをひっかけることは、愛国的な義務なのである。」

排他的な政策の結果、ロマン・ロランの文学作品は軽視されるようになっていった。時代おくれの神学生、創造的想像力をわざとらしいささいな事柄でおきかえられると信じている素朴な甘言家などという表現で、人々は彼の姿をめちゃくちゃにしていた。こういった種類の宣言は、出くわすとはもっとも予期しなかった人々にさえ見られるのである。たとえば、アンドレ・ジッドであるが、とはいえ彼は、ほとんどまったく慣例追従者ではなく、しかも『ジャン＝クリストフ』の作者にじつに美しい一文を捧げたことがあった。彼の『日記』の戦争時代

に関係する部分には、奇妙な発言がいくつか見つけられるのである。ロランの大小説は翻訳で読まれるほど得をするだろう、と彼は書いている。なおまたこのほとんどアッティカ風洗練さのない作家は自分の祖国よりも、異国の空の下に住むべきであろう――「彼はもはやフランス語が存在しない、フランス芸術も、フランス趣味も、そして彼が否定し、また彼には拒絶されている才能のどれ一つも存在しないということで、利を得るよりほかにないのだ。」

まったく公正に、ここに中立国の注釈を加えるのをお許しいただきたい。何年ものあいだ、数十年来――グラーヴロットやスダン[2]以来――わが平和な土地はドイツのひそかな進出の目標とされてきた。感じのよい親独的感情性にいろどられた、もちろんいっさい政治のまじらない諸観点である。尖頭もしくは鷲印の鉄かぶとやクルップ社製大砲は、もうろうとした地平のはるか遠くにしか見えてはいなかった。不幸にして、この宣伝の刃は、対抗の作用で、また奇妙な効果をもって、フランス文明の諸価値に反対した。侮蔑をこめた調子で、ヒットラーの時代はあまりにもうまくこの調子をよびもどすのであるが、人人はフランスをごく軽い要素に、退廃的で規律のない、個人主義者の寄り合いに切り下げていた。文学といえば、『旦那、奥様と赤ん坊』[3]か『ベラミ』[4]であった。哲学は表面的かつ懐疑的にすぎず、あるいは、せいぜいよくてもアベ・コワニャールのごとき人物の優雅な賢明さだけにとどめていた。美術はトゥールーズ＝ロートレックや、黒い手袋をつけてものうそうにカフェのテーブルにひじをついている女たちの肖像画に帰した。この全体として軽薄な光景は、観光用ステロ版によって確認されていた。だれもがモンマルトルやフォリ＝ベルジェールの話を聞かされていた。ソルボンヌやエコール・ノルマルの精神は知られてはいなかった。

ロマン・ロランの面目は、この困難な時期において、こういった種類のステロ版の歪曲に反対する、忍耐強く説得する力をもつ節度あるイメージを、その文学的創造によって提出することにあった。彼の作品は同時代人の不当な侮辱よりもいっそう真正な美しさをもって、情熱的な良心と誠実な精神のフランスが存在することを証言していた。

彼を鼓舞していた感情の水準が平均以上のものだったことは真実であるが、「半月手帖」[5]が結集していた熱誠者たちのグループが生きていたのはまさしくこの水準であり、にもかかわらず、それはやはりフランス的なのであった。純粋な心で、彼はふつうヴェールをかけられている自国の文化的遺産のいくつかの価値を宣明した。思想の明晰さ、犠牲精神、確信への忠実さなどである。この嘲弄された理想主義者、このジュネーヴの除け者以上に、国際的な面で祖国に大きな貢献をしたいかなるフランス作家もおそらくないという、ものさびしいパラドックスを表明してさしつかえないのである。

スウェーデンでは、ロマン・ロランの本はフランスや連合国の友らにとって集合点の役割を果たしていた。彼らは『ジャン＝クリストフ』の否認を、ことにドイツが初期におさめた勝利のあと激しかった、憎しみと戦争とのエネルギーに対立させることができるのを喜んだ。『戦いをこえて』のなかの多くの論文は、スウェーデン自由主義最大の機関誌、ストックホルムの「ダーゲンス・ニヘテル」(Dagens Nyheter)に発表された。この孤独な作家と文通していたスウェーデン人のなかには、セルマ・ラーゲルレーヴや、とりわけ長期間にわたる文通による女友だちエレン・ケイらがかぞえられる。エレン・ケイの男女同権主義思想は、ヨーロッパ文学を推進していた認識と結びつくものであった。一九一四年の戦争勃発後、彼の著作の一連の翻訳がスウェーデンで出版された。『ジャン＝クリストフ』にはじまり、やがて「フランス革命劇」そして、ベートーヴェンやトルストイに関する著作がつづいた。

以上のような背景の上に、ロマン・ロランの受賞候補問題が浮かび上がるのである。「ニューヨーク・ヘラルド」紙が流したあの無謀なうわさも、一粒の真実を宿していた。ロマン・ロランは一九一五年度のノーベル文学賞に推薦されていたのであった。候補推薦決議案は、ウ

1 Germain Gancelon ロマン・ロランのロマン (Romain ローマ人)に対してジェルマン(ゲルマン人)、ロラン(Rolland)に対しては、中世の叙事詩『ロランの歌』の主人公ロラン(Roland)を裏切ったガヌロンでもじったもの。

2 フランス-プロイセン戦争(一八七〇～七一年)の戦場となったところで、後者でフランス帝政は滅びた。

3 ギュスターヴ・ド・ローズ 一八六六年作。

4 ギー・ド・モーパッサン。一八八五年作。

5 シャルル・ペギーが一九〇〇年に創刊。ロランの『ベートーヴェンの生涯』や『ジャンクリストフ』もこれに発表された。

プサラ大学の文学史家ヘンリック・シュークから発せられたが、彼は政治活動よりも広範な学識によって知られている人物であった。候補資格は委員会の投票において、明白なかたちでかつ詳細に検討された。この作家はあまりにも矛盾に満ちている、さらに芸術的見地からしても、あまりにもむらがあると判断されていた。しかし、それでも提案拒否は満場一致ではなかった。優勢ないくたの声は、雄弁に区々の意見を主張した。彼の熱烈な支持者たちの強調したところによれば、ロマン・ロランはその年、公式に推薦されていた候補者、スペインのペレス・ガルドス[1]よりもたしかにすぐれていたのである。

さまざまな情況や、維持するには大いに手練を必要としていた中立の力のために、一九一五年度の賞もまた延期される――説明のつかぬさまざまの不慮の出来事に足をすくわれたと思えるほど延期されることとなった。翌年、論争は再びぶり返され、新たな論拠や新たな提案でさらに激しくなった。賞の授与を年々延期することはとうてい許されなくなっていた。たとえ大砲は鳴り、世界の若者が殺し合いをつづけようとも、スウェーデン・アカデミーはいまは亡きノーベルの理想主義精神において義務を果たさねばならなかった。世論も、これと同じ程度に、まさしくロマン・ロランに有利に転回していた。かれの候補資格はいまやさまざまな方面から支持を受け、すこしでも激烈になる危険のある論争には自発的に加わる習慣のほとんどなかった人々によってまで支持されたのである。ついに、十一月九日、決定がくだされ、一九一五年度と一九一六年度の賞が同時に、いささかソロモンの裁き[2]よろしくきまったのである。ひとつはロマン・ロランに、そしてもうひとつはスウェーデンの作家ヴェルネル・フォン・ヘイデンスタムに与えられることになった。後者への授与は国内的な事柄にとどまったが、ロマン・ロランへの授賞は世界文学に属することであり、このことから国際的な文学界の判断にゆだねることであった。

「アカデミーはあなたに、知的世界のすべての独立的な魂の人たちに賞賛されることになるこの名誉を、あえて受けとっていただくことを希望しております」と、在スイス・スウェーデン大使が、ロマン・ロランに送った手紙には書かれている。彼の死後刊行された『戦時の日記』によって、この驚くべきニュースが告げられたときの彼の反応をたどることができる。この知らせは、まずストックホルムの外務省から電報によって知らされたのであった。彼は最初、この褒賞をことわろうとした。一方では、これが彼の自由を妨げ、他方このため新たな迫害を招くかもしれないからであった。にもかかわらずこの十一月十五日の金曜日は、じつに穏かな満足の一日であった。シエールにおける孤独な歳月の腹心の友、P＝J・ジューヴは、この日の模様をつぶさに記して残してくれた。「小さな亡命者グループが、狭いが敬虔な友情の教会のように、彼の部屋に集まって彼を囲んだ。彼らは世界の数多くの友人たちを代表していたし、いささかそれを意識していた。そしてホテルの十八世紀風の古いサロンで、ロマン・ロランはピアノに向かった。音楽、心情と精神の至高の忘却。われわれにとって、魂の奥深い救済、偉大な兄弟的な音楽家たちの魂が、その子どもたちの一人のまわりにかけつけたのであった。」

ロマン・ロランは賞を受け、それを赤十字やフランスの慈善事業に寄付してしまった。なおまた、そのとき、フランスが彼の精神にことさら現前していたのである。これを喜んだ人々のなかには、スイスに監禁されていた一群の連合国兵士があった。彼がその感謝の動機を知らせたのはまさに彼らに対してだった――「この敬意がさし向けられているのは、私ではなく、わが国に対してだ。私がこれを受けるのはそのためなのであり、これが世界中にフランスを愛させるという考えをひろめることに貢献するなら幸いだ。」

彼がスウェーデン・アカデミーにあてた礼状で表明したのも、これと同類の考え方である。そこには、何年もまえから同国人たちから愚弄されながら、自分の国の名において誇り高く語っているひとりの人間のことばが聞かれるのである――「私の三十年の仕事に対してお認めくださったこの高い敬意は、私がそれを返そうとするわが国に対する誇りを私にいだかせるものであります。なぜなら、私の理想主義の最良のものと兄弟としての人類への打ちこわされることなき信仰を、まさしく私は祖国に負っているからです。私は、モンテーニュや、ヴォルテールのごとき人たち、また十八世紀フランスの哲学者たちの遺産である、理性と寛容と憐憫の精神のあまりにも弱い通訳であり忠実な下僕にすぎないのです。あなたがたの尊敬すべき投票が、この血なまぐさい時点で、現在のさまざまの悲惨さにもかかわらず、未来の英知や和解したヨーロッパに対してわれわれがいだいている希望に、新

しい力をもたらしてくださったことに感謝したいと存じます。」

暗いこの数年間は、ノーベル祭は行なわれず、まただれ一人ストックホルムへ受賞者を招こうと考える者もなかった。しかし彼はアカデミーと関係を保ち、『ジャン＝クリストフ』の分厚い原稿をアカデミーに提供した。作家の思い出に対する尊敬から、第二次世界大戦後パリに創設されたロマン・ロラン文書館（アルシーヴ）に預けられたとはいえ、アカデミーはなおその所有権者である。アルシーヴにはまた受賞の証状もおさめられており、受賞理由が次のようなことばで書かれている――「彼の著作のもつ偉大な理想主義ならびに、さまざまのタイプの人間像を描いたその共感と真実さに敬意を表して。」

用意周到な書式というものはあまり表現が適切ではない。それはあくまでも中立性を保つ必要を反映しており、ノーベル賞の年代記においてロマン・ロランの受賞がまとっている、正当な光輝をかがやかしてはいない。しかしこれはまさしくただたんに受賞者の名誉となるだけではなく、スウェーデン・アカデミーみずからの名誉をもはずかしめない選択なのである。

1　一八四三～一九二〇年、スペインの小説家、劇作家。代表作に、十九世紀の歴史を小説風に描いた『国史挿話』全四十六編がある。

2　イスラエルの王ソロモンが、幼児の母親を判定するためにした英知ある裁きの故事（聖書の「列王紀」三）による。

3　一九二〇年のことであり、第六巻『アントワネット』を除くすべての草案、覚え書き、原稿は、二つの紙箱におさめてノーベル図書館へ寄託された。『アントワネット』の原稿は、故郷のニエーヴル県図書館に一九二八年に寄託された。

（注）第一次世界大戦（一九一四～一八）と、敵対関係が終わったのちもつづいた混乱状況のために、一九一六年から一九一九年の期間、ノーベル賞の伝達にはなんら式典が行なわれなかった。

一九一五年度ノーベル文学賞は、一九一六年十一月九日ロマン・ロランに授与され、同じ日、一九一六年度の賞がヴェルナー・フォン・ヘイデンスタムに与えられた。

したがって、この期間には受賞演説も行なわれなかった。

なおまた、一九一四年にはノーベル賞が授与されなかったことも思い出していただきたい。

（山口三夫訳）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com